

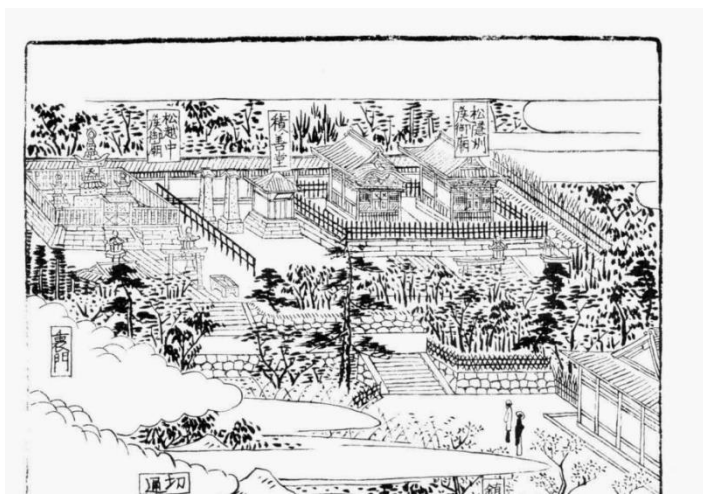
松平定信の桑名来訪

郷土史家 西 羽 晃

松平越中守定信は徳川御三卿の一つである田安家の生まれで、将軍・徳川吉宗の孫にあたる。奥州白川藩・松平（久松）家の養子となった。非常に聡明であり、遂には幕府の老中首座・将軍補佐ともなった。彼は引退して、白川藩主の座を息子の定永に譲った。定永は文政6（1823）年に桑名藩へ移封となった。その時に定信自身は江戸で隠居生活をしており、桑名には来ていない。定信自身が桑名へ来たのは旅の途中に一度だけある。

定信は幕府の老中首座であった天明8（1788）年正月、京都の大火で皇居も焼失した。その状況を視察し、復旧の工事計画を立てるため、定信は同年5月9日に江戸を発って、中仙道を通して上京した。老中首座とは現在の総理大臣であるから、公用出張であり、大行列であったと思われるが、なるべく簡素な行列との方針であった。しかし京都の入り口である蹴上から三条河原の宿舎までは群衆が立錐の余地もないほど詰めかけた。5月22日に京都に到着し、25日に仮御所に参内して、光格天皇に拝謁した。翌日は御所の焼跡を視察した。

5月29日に京都を発って、伏見・大坂・堺・奈良をめぐり、6月7日に伊賀上野で宿泊、8日は加太峠が通行止めになっていたようで、遠回りして東海道土山宿へ出て、土山本陣で休憩している。同日は関宿で泊まって、その後は伊勢神宮へお参りしている。14日に四日市宿清水本陣で休憩して、桑名に泊まったようだ。



定信が参詣したころの照源寺・松平家墓所

桑名では「桑名城近キ 崇源公、鎮国公、其他諸壇廟へ詣テ玉フ」（守国公御伝記稿本・桑名市立中央図書館蔵）とあって、崇源公（松平定勝）、鎮国公（松

平定綱) など松平 (久松) 家の墳墓がある照源寺に参詣している。その当時の墳墓の様子は『久波奈名所図絵』に描かれているが、右の「松隠州侯御廟」とは定勝の墓であり、その横は妻の松源夫人の墓で共に廟堂となっている。この廟堂は朽ちたので、明治6 (1873) 年に現在のように墓石に改築されている。「松越中侯御廟」は定綱の墓であり、現在と同じ石造りである。

その後は東海道を下り、静岡で久能山東照宮を参拝して、6月27日に江戸に帰着した。

定信が桑名で大塚本陣に泊まったと思われるが、それを示す本陣史料をはじめ宿場史料、町方史料が桑名に残されていないのが残念である。なお桑名市博物館の杉本竜館長が「松平定信と三重『天明八年の伊勢参宮』」(「三重県史だより」平成29年3月) で「感徳禄 副軸」(江戸東京博物館所蔵) を典拠に述べられている。